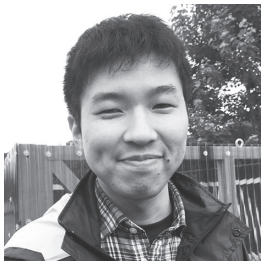
■□ 第２部　実践報告Ⅰ

若者サポート、森づくりの取り組み
－但馬地域における実践－



上村 俊雄（企業組合労協センター事業団但馬地域福祉事業所）

私たちが活動している地域は、京都府のなかでも北部の、京丹後市を中心としたエリアと、兵庫県の豊岡を拠点とする但馬エリアです。今日は、今に至る経過をお話しながら、なぜこのような実践を行ってきたのか、どういうところを目指しているのかをご説明しながら、協同労働の実践を少しでも感じていただけたら、ありがたいと思っております。

最初に、全体像をお示ししますが、もともとは、若者の就労支援からスタートをしています。そういうなかで、多くの若者たちと出会ってきて、様々な方の困難や課題を一緒に共有するなかで、様々な事業を展開してきました。現在は、若者の就労支援からスタートしつつも、障害のある方で生活に困窮された方の居場所であったり活動の拠点を作っていったり、そういった方たちの働く場所として、山の仕事という活動を行ったり、引きこもりの支援を行いながら、多様な事業を展開しています。

今に至る経過ですが、もともと 2009 年に、若者の就労支援という形で厚生労働省の事業の、若者サポートステーション豊岡を開設し、但馬地域と呼ばれる兵庫県の北部地域を活動の拠点にスタートしました。その際に、経済圏域を共有する京都府の京丹後市も対象エリアとして含めて、支援を行ってきました。

この若者サポートステーションを開所するきっかけは、私たちの組織が地域の方と協同で開催した、神戸市での協同集会で、豊岡市のコウノトリの野生復帰の取り組みを話していただいた際に、豊岡市の方とも関係ができて、そのなかでぜひ協同労働の取り組みを豊岡でできたらいいなという話で意気投合し、若者就労支援の事業所を置いたという経過があります。

若者サポートステーションでは、働くことに自信が持てなかったり、いろいろな仕事をやってみたけどなかなか続かない、といった課題を感じて来所される方がおられます。もちろん、その人が自分の就職活動に課題を感じて、相談されるのですが、当然それにはいろいろな理由があります。たとえば、背景に、引きこもりであったり不登校であったり、いじめの経験、発達障害や精神障害など。さらに言うと企業での活動のなかでの過重労働で潰れてしまったり、いろいろな社会課題があって、その方自身の得意・不得意も当然ありますが、それを取り巻く社会環境にも課題がある。こういうことが、サポートステーションの活動から見えてきました。

当初は、いろいろな職業訓練を開講し、その方に資格を取っていただき、経験を積んで、その方の力を伸ばして就職につなげていたのですが、それだけでは、なかなか追いつかないという現実がある。そう感じて、併せて、どう働く場を作って、地域のなかにそういう方が生きていける場所を作っていくか、という視点で事業を行って

きました。

1つのアプローチとして、様々な制度も活用しながら支援の幅を広げてきました。たとえば、生活困窮者の自立相談支援事業であったり、就労準備支援事業も、行ってきています。活動するなかで、いろいろな課題が新たに見えてくる部分もあります。働きづらさを抱えた方が再び働くまでに、時間をかけて準備をしたり、力をつけたり、社会になじんだりする場所が、なかなか社会には存在していません。また、そういう方が仕事に就いても、社会的に孤立を抱えてしまっているような方であると、就職したあとの悩みや困りごとを相談できる場所がなくて、また今度、出会ったときには結局、そこを辞めて帰ってくる。なかなか安定しない。長期的な支援という部分で、やっぱり仲間とか居場所を作るのが、大事な視点になるのかな、と感じていました。

そこで京丹後市とも、いろいろな形で連携をしていました。農業や、山仕事、企業と生活に困窮された方をつなぐという取り組みをやっていましたけれど、これらをばらばらでやっていても、なかなか難しいと感じていました。これらの取り組みを1つにまとめた形で、仲間づくりをしていく場所が作れないだろうか。そういうお話を京丹後市として、仕組みを作りました。そこでは、いわゆる、その方が支援を受けるだけではなくて、地域が抱えている課題を生活困窮者と呼ばれている方が活動することで、地域にとって貢献して、地域を支える一員になれるという取り組みになっていく。なかなかすぐに一足飛びには行かなかったですけども、そういう思いで作ってきています。それが、就労体験による居場所づくりの事業ということで、市役所と一緒に取り組んでいます。いろいろな形でつながりがなくなってしまった方と一緒に、体験活動や、居場所のなかでの活動を通して、つながり、仲間を作っていって、新たに地域社会に戻っていくというような取り組みをしました。

そういう活動をしていくなかで、ひきこもりの課題というのが大きく挙がってきました。サポステで活動していても、生活困窮者の支援を行っていても、感じたところなんですけれども、なかなかどちらの事業も実際に出てきてもらったあとの支援という形になるので、なかなか出てきていただくまでのところっていうのがアプローチしきれていなかった。そこで、これについては、京都府のひきこもりの相談窓口の事業を受託して、アプローチをしていって支援をしていく取り組みも行っています。最近ですと、コロナ禍の影響もあって、なかなか生活が大変だという方もいる一方で、別の意味で言うと緊急事態宣言なんかが発令されると、飲食業界さんなんかは、事前に仕入れてたものが使えなくなってしまって、それが逆に余ってしまうみたいなことも発生していました。そこをつなげられないか、ということで京都生協さん等にもお世話になりながら、フードパントリーみたいな活動も行ってきています。そういう取り組みに、協同労働を使って、地域づくりをやっていけないかっていうところで、研修会も行っていますが、この辺りは、このあとの古村理事長にお話してもらうので少し飛ばさせてもらいます。

ちょっと、時代は戻ってしまいますが、ここからは、森林整備も含めた山の仕事であるとか、環境整備みたいなところにどう向かっていったのか、どういう意味があったのか、ということをお話します。2009年にサポステがスタートし、翌年に取り組んだ活動として、農山村の地域の担い手を育成するという文脈で、職業訓練を行いま

した。これは、1 年間の訓練を 2 回、2 年間行っていましたが、味噌作りであったり、郷土料理であったり、生業みたいなものを地域の方々から教えていただき、私たちは雪かきのボランティアとかも含めて、いろいろな形で地域に貢献していきながら、地域で働いていく人材を作っていく、という取り組みを行いました。そういう経験も積んで、みんな元気になってくるんですけど、なかなか、訓練という枠組みだと上手く仕事を作るっていうところまではいけなくて、訓練が終わったあとの継続が難しいな、と感じていました。継続して地域で活動していくとなると、何らかの仕事が必要になる。少子高齢化が進む地域で、どう仕事を作っていったらいいかを考えていました。そうしているところに、今まで使っていた職業訓練の枠組みが大きく変化をしました。生きづらさを抱えた人たちが経験をする場所っていうのは、この訓練のなかではちょっと作れないなという枠組みに変わってしまったので、市役所に相談すると、障害のある方が地域でいろいろな社会生活を営むための支援をする、地域活動支援センターという仕組みがある。そういう仕組みを使ってひきこもりがちだったり、生きづらさを抱えている人たちの、いろいろな経験の場所を作ればどうか、と教えていただき、その結果「森の学校だんだん」という場所を運営しています。これは、障害のある方の、いわゆる社会活動を支援する場所ではあるのですが、そこで農業やコミュニティ喫茶を行って、地域の方と交流を深める場としても機能しています。

そういうなかで、職業訓練の一環として 2012 年に新エネルギー環境コースという訓練を行いました。これはその前年、2011 年に東日本大震災があって、エネルギーのあり方を改めて見つめ直す必要があると組織のなかでも話が挙がりました。そうであるなら、まずはやっぱりそういう働き方、仕事をどう作っていくかを職業訓練という形で、地域で失業している人たちと一緒に考える機会を作れたらどうかということで、エネルギーのあり方を学ぶ職業訓練を、県に提案をするという形で行いました。ただ、なかなか私たちだけが言っても県も納得はしないので、市役所にも相談をして、市にもそういう職業訓練は必要だということを推薦していただいた上でお話をして、企画を提案しました。

そのなかでいろいろな学びを行いましたが、特に訓練生の人たちが、これをやりたいと言ってくれたのが、木質バイオマスです。山の仕事を学ぶなかで、山が荒れている現状とか、山が活用されていない現状も感じていて、この山を次の世代に遺していけるような、そんな山にしていく。そういう取り組みを仕事にできないだろうかと思ってくれていました。じゃあ実際に地元はどう考えているだろうか、ということも聞いてみると、現状についてはやっぱり良いとは思ってはいないですけども、畑なんかは皆さん自分たちで管理できるという思いを持っていただいている。しかし、山となると、自分たちじゃどうしようもできないと言われる。何か諦めみたいな、そんな思いも感じながら、でも先祖から受け継いできた山だから、なんとかしたいという、2 つの思いを感じているという現状が見えてきました。

そうであるなら、私たちが仕事として、働く場を作っていくことはできないだろうかということで、訓練生が主体になって林業グループという形で、「Next Green 但馬」という取り組みを始めました。当時、訓練生が地域の方に、こういう取り組みをやるのでぜひ山を貸してください、とお願

いをして回ったのですが、今でも、「次世代に遺す山づくり」という思いを中心にして事業を展開しています。やっている内容は、間伐を行ったり、作業道作りを行ったり、あとは竹林なんか荒れている現状があるので、竹林の整備をいろいろな制度を活用しながら行ったり、できる範囲で危険木の伐採も請け負ったりしています。それから、森林組合さんのように大きく山を確保して活動することは難しいので、山から出てくるようなものも加工して販売したりしています。たとえば、地域のホテルにクラフトコーナーを作っていただいて、活動の場所を広げています。

先ほども言った通り、次の世代に山を遺していく、ということがもともとのスローガンで始めているので、山を整備するのは大事にしています。ただ、次の世代の人たちが、山が必要だとか、山が大事だと思っていただかないと、次の世代につながっていきません。そこで、森のなかでのイベントを行って、山がいかに必要な存在であるのかということを伝えています。したがって、私たちが考えている山の仕事というのは、当然、山を整備していくという取り組みではあるのですが、それだけではなくて、山をどう活用していくのか、もっと言うと自然をどう活用していくのかというところを、これからもどんどん外に発していく存在でありたいと思っています。

そういう取り組みを行っているなかで、女性の組合員が山で仕事をしていると、この山を使って子育てができたらいいな、みたいな、そんな意見が出ました。そういう思いを、市長懇談等でお話をしたりしていると、すごく関心を持っていただいた方が現れて、そういう方と一緒にいろいろな取り組みを行っています。そういう経過もあって、現在週 2 回ぐらいの取り組みではありますけども、山のなかでの子どもたちの保育の活動を行っています。どういう意味があるかっていうと、1 つはやっぱり、自然を大切に思ってもらうということですが、それだけではなくて、自然のなかで取り組むことで、子どもたち自身の主体性を大事にしていく。そして、大人はその子どもが育つ姿を見守っていくということ。当然、いろいろと危ないことはありますが、それを成長の糧だと考えて、そこはどきどきしながら見守っていく。そんな活動を行っています。

改めて、私の自己紹介をします。私は、もともと最初から職員だったわけではなくて、サポートステーションに通う利用者でした。私は、高校ではそれなりに真面目に勉強したのですが、大学になって環境になじめず、友達を作るのも上手くいかなくて、3 年生のころから、まったく大学に通わない、みたいなことを続けていました。そんなこともあって、実家に呼び戻されました。病院に通い、お医者さんからサポートステーションがあるよと勧められて、利用するようになりました。

サポステの支援ですごく役立ったことってなんだったのかって言われると、なかなか難しいんですけども、一番印象に残っているのは、勉強の日という取り組みです。勉強の日と言いながら、みんなで本とか持ち寄って自主学習をする活動でした。そのときに、不登校の利用者がいて、その人の先生役をお願いされたりということで、ちょっと慣れないながらも一生懸命に説明したり、みたいなことをしてると、やっぱり役割がある喜びというか、そこの楽しさっていうのはありました。そういうなかで、事業所の他の仕事も手伝ったりしているうちに、一緒に働きましょうと言われて、この大変な

道に進んできたという流れです。でも、私は当時、電話恐怖症で電話に全然出られないという状態だったので、ほんとにそんな状態でいいんですかっていう、そんな話をしてたんですけど、職場のみんなが支えてくれました。ここは、いわゆる協同労働として、みんなが当事者として考えるというのが、すごく出ている部分かなと思います。一般の企業ですと社長さんが、この人を受け入れるよ、と言って受け入れるだけです。サポステでも、社長さんはすごく理解あるんだけど、近くにいて働いてる人が全然その人に対する理解がないので、すごくきつく当たられて帰ってきてしまうことがあります。私の場合、こういう人が入ってくるよっていうところを、そこにいる職員がみんなで共有をして、支えていこうよって思ってくれました。だからこそ、電話に私は一切出ない、みたいな人間でしたけれども、支えていただきながら電話の出方を教えてもらったり、みたいなことでやってこれたのかなと思います。もちろん順風満帆ではなくて、いろいろな職業訓練をスタッフと一緒に担当しましたけど、なかなか上手くいかなかった経験もしているので、やっぱり働く場所っていうのは自分たちがつくるものだと思っています。

よくこの話、するのですが、私は資源を活用することを大事に考えています。カウンセリングの世界で資源というのは、その当事者が持っている力のことで、私たちが何かするっていうよりも、その資源に気づかせたりとか、そこで妨げになってるものを一緒に考えていくというところになります。地域の資源というのは、課題と表裏なのかなと感じています。これを感じるには、やっぱり当事者性というのが協同労働のところでは一番大事ではないか、と私は思っていて、地域課題が当然いっぱいありますが、そこで当事者と呼ばれる人っていうのはいったい誰なのかっていうところは、いつも考えているところです。先ほども言った通り、サポステに来る人たちの裏には、いじめがあったりとか、いわゆるブラック企業みたいな過重労働みたいなものがあったりとか、いろいろな課題があって。その問題の根っこっていうのはやっぱり、もっと多くの方が当事者になるべきなのかな、と思っています。したがって、もっと地域を知り、自分を知って、みんなで協同していくということが大事なのかなと思いながら事業を行っています。以上になります。ありがとうございました。

【大高】今、どのくらいのメンバーがいらっしゃるか、どんな感じの人たちがいるか、ご紹介いただけますか。

【上村】メンバーとしては、だいたい全体で 20 名ぐらいの職員がいます。パートタイムの方もちょっといますけども、ほとんどが常勤で働いているというような形になります。どんな方って言われると、まあ一癖も二癖もあるような方々がいっぱいいて。日々、大変ながらやっております。